

建物の特徴

旧朝倉家住宅は、木造2階建てで、ほぼ全室が畳敷き、屋根は瓦葺[かわらぶき]、外壁は下見板張[したみいたばり]、一部が漆喰塗となっています。明治時代から昭和30年頃までに建設された大きな邸宅の特徴を顕著にあらわしています。

主屋は2階建ての大規模な建築です。1階南側に10畳の仏間、12畳の中の間(居間)、10畳の寢間(現在はこの三間を一室の会議室に改造)、北側に納戸、女中部屋、事務室がそれぞれ並んでいます。2階は15畳、12畳半の二間続きの広間があります。

主屋1階は家族の日常生活の場であり、年中行事などで正式に客を迎えるときは、玄関左手の応接間(和室)を用い、玄関右手の洋間は、来客や執事の事務のためのスペースでした。これに対し北側の部屋は、家族や使用人が使用していました。2階は朝倉虎治郎が公職にあった際、会合などに使用されていたと思われます。

西側の廊下の先に杉の間(三間)があります。杉の木目を意匠のテーマにした趣味的な数寄屋座敷で、当主はここで陳情など私的な客を応接しました。

家政を司るために、奥に2階建ての大きな土蔵を造りました。また、後に子供が増えたとき、北側に台所や食堂、家族室(面皮[めんかわ]部屋、現在は管理事務室)を増築しました。



庭園から見た主屋

洋間

旧朝倉家住宅に洋館はありませんでした。華族や財閥とは違い、洋式の大規模な宴を開く必要がなかったからです。しかし、立派な洋間を一部屋だけ玄関脇につくりました。来客用に洋式の接待が出来るようにとの配慮からです。一部にだけ洋間を持つ邸宅は多く存在しました。

この洋間は、家や商売に関わる日々の来客への応対、執事の事務のための部屋として使われていました。当時の床は板張りで、上げ下げ窓など洋風意匠の特徴が見られます。



洋間から玄関を望む